

第 13 回定例教育委員会 会議録

開催月日 令和 4 年 1 月 5 日（水）

開催時間 午後 1 時 15 分から午後 2 時 00 分まで

開催場所 教育委員会室

出席委員 教育長 三井 孝夫
教育長職務代理者 佐藤 喜美子
教育長職務代理者 岡部 和子
委員 松坂 浩志、小澤 幸子、長澤 重俊

出席職員 教 育 次 長 小田切三男
教 育 監 中 込 司
教 育 監 手島 俊樹
理 事 降籬 友宏
次長（総務課長） 藤原 鉄也 高校改革・特別支援教育課
高校改革・特別支援教育課長 保坂 一郎 主 幹 加藤 忠
総務課主査 新海佐貴子 主 任 瀧田 大

傍聴人 0 名

報道 0 名

会議要旨

[教育長開会宣言]

1 議 案 な し

2 報告事項 な し

3 その他報告

(14) 令和 3 年度中学校卒業予定者の第 2 次進路希望調査結果の概要について

[説明] 高校改革・特別支援教育課

佐藤委員 1点お願いします。
ご説明ありがとうございました。
通信制の希望が増えているのは、この卒業生はコロナの影響を2年間受けてきた生徒たちだと思うんですけど、不登校の生徒がこういう所を希望しているのでしょうか。

保坂課長 通信制を希望している子どもが増えておりますが、その子どもが不登校なのかという所までは、この調査では分かりません。ただコロナなどの要素はあるのではないかと思います。

教育長 例えば、不詳というのも増えているという説明がありましたけれど、この数字がコロナの影響なのかということは、もう少しフォローアップしてみないと分からない、まだそういう状況でございます。

小澤委員 通信制の高校を、全国一区のような形でポジティブに、学校に適應できるとかできないとかという意味ではなく、積極的選択という、あえて選んだ結果で増えているのかということも知りたいなと思いました。

保坂課長 またフォローアップで少し調べてみたいとは思いますが、確かに県外の私立の通信制のような独自のカリキュラムを選択、希望して選ぶお子さんも多いのではないかと考えております。

松坂委員 私が参加している勉強会で、校長先生たちが不登校の生徒の数が多いの悩んでいるというのをよく聞きます。小学生や中学生で、二桁台で今日は30人ぐらいただという話も聞きます。その不登校の生徒の人数に対して、不詳の人数、まだ高校の選択が決まっていなかった人たちがいるのではないかと考えても、この人数が割と大きいのかどうか。先程もその人数がつかまえていないという話があったので、今後やはりフォローアップの中でやっていくことは重要ではないかと少し思いました。

それと、最近私の知り合いでも、不登校になったわけではなく高校に行かなくなってしまった、進学するなら予備校に行こうということで予備校に今通っている高校をやめてしまったと、そういう人もいますよね。最近選択が多岐に渡っているのだから駄目ということではなくて、不登校でも大学進学の道の別な方法があると気が付いた人もいて、そちらを選択しているんですね。そういう今の教育のやり方というか、色々な個性を認めながらというのがあるので、そういった中では不登校で進路が定まらない人、それもまた問題だろうし、進路希望が単純に高校に進もうということではない人たちもいて、そういう進路も今度は選択肢としてつかまえてはいけないのではないかと気がしているんです。

それともう一つ、小学校から中学校に移る人の人数はどこかで把握されているのでしょうか。仕事の取引先の方が、小学校までは山梨で、中学校になると東京に戻ってしまうんです。なぜかという、小学校前までは県内にいても、小学校や中学校に入る時になると、山梨県内で選択する学校が非常に狭められてしまっているという話、あまりないから、東京に戻ってしまう。そして単身だけになるという話を結構聞きますね。それを教育委員会の場で何かつかまえて、そういう人たちを県内に増やしていかないといけない。県内に今、転勤者が結構いて、東京からの転勤者の会社が山梨にあって、そこに来る人たちが子どもたちを山梨県内の学校に進学させてないという話、そういう人たちの子どもたちを県内に留めるような動きが必要ではないかと思っています。だからその2点、不登校の人たちがどういうところに行っているのか、今後フォローアップをして、その選択肢が幾つか多岐に渡ってきているので、単純にこれだけの見方ではいけないのではないかとというのが一つ。

そしてもう一つは、転勤者が県内の小学校や中学校に入ってくれる動きにつなげていかないと、人も増えていかないとと思うので、何かそういう取り組みをして県内人口を増やすことが出来るのではないかと思うんですけれど。最近幾つかそういった話が私の耳に入ってくるので、そういったことを少し捉えたほうが良いと思っています。

教育長

ありがとうございました。

1点目の話なんですけど、委員がおっしゃるとおり、せつかくの調査なので、そのフォローが必要であると思います。元々この調査そのものの目的というのは一義的には子どもたちの進路指導の資料ということなので、これはこれで一端は良いんですけど、その先のことをやりましょうということですので、また事務局で作業をしてもらいたいと思っています。

2点目の話なんですけれど、おっしゃるとおり、県内の中でもそういうことが起こっているという話を聞いたことがあります。会社の近くで幼稚園、保育園までは育てているけれど、小学校に上がる時にもう少し大きな所へ引っ越すというようなことも聞いたことがございます。当然、小中というのは市町村単位ですので、なかなか我々のほうから細かい所のアプローチ、あるいは特色付けというのが、直接できない部分というのが非常に多いわけですが、小さい所や可能性があるような所には極力働き掛けて、魅力のある学校づくりというものをやっていただけたらいいなことをぜひ考えていきたいと思っています。そのためにもそういったデータとしての把握を事務局で進めていきたいと思っています。おっしゃること、至極ごもっともな話なんだろうなと思っています。

- 岡部委員 その一つに関わることです。今年も秋山義務教育課長に相談したんですけど、アメリカに小学校まで住んでいて、向こうの言葉しか話せなくて、こちらに戻って来たときに私立も含めてどこも受け入れる所がなくて、教育委員会にも相談しましたが、結局最終的には東京に行ってしまったという方たちがいました。親御さんが日本人であってもそういうことがあったという事実がありました。
- それからお願いなんですけど、あけぼの支援学校、甲府支援、わかば支援学校が今回もゼロですよ。定時制も都留高校がゼロですよ。去年も今年もそうだとしたら、教員たちの人数は切らないで、これからのことも考えて門戸を広げておいていただきたいという要望です。
- 小澤委員 特別支援学校の希望者が少ないですが、常に何人ぐらいで教育をしているのでしょうか。
- 保坂課長 例えば甲府支援学校ですと、高等部は23人です。
- 教育長 この調査は普通の中学校の調査ですので、特別支援の中学部の希望調査はとおってありません。ですので、支援学校の子は、大抵中学部の子はそのまま持ち上がりで、その高等部に入る子が非常に多いので、そういった意味ではその子たちも計算に入れながら、学校の編成をしていく形になります。
- 保坂課長 そうですね。甲府支援は高等部が26人、あけぼのは25人ということになっていまして、教育長がお話ししたように、甲府支援学校の中学部については、この調査の対象になっておりませんので、特別支援学級のお子さんが高等部を希望するというものがここに数字として出ています。
- 岡部委員 私も特別支援を持っていたので、中学校の特別支援の子をそこに送るんですけど、意外とこの理療士は大人になってからもこういう学校に通って資格を取っていらっしゃる方がいるんですよ。結構40幾つになって急に眼が悪くなってということで通う方もいたりするので、やっぱり門戸は広げていただいたほうがいいなという意味で、ほかの学校もあえて言ってみただけなんですけれど。そして都留高も同じだということなんです。すみません。
- 佐藤委員 一步前のお話に戻ってしまうんですけど。本人たちの希望ももちろんあるんでしょうけれど、小中のからみでもう少し調査をという話の関わりで、親御さんの考えで色々変わってくるなと思います。私立小学校に6年間通わせていた親御さんが、地元の中学校へ今度は送りたいと、私立から公立の中学校へ入れたケースもあるんですね。この間の一日教育委員会の第2分科会に来たお母さんは、学校の統廃合の関わりで自分の子どもを地元の学校へ行かせたいと、そういう思いを持っているお母さんもいるので、公立の中学校ももう少しアピールする必要があるのかなと思います。魅力や色々な郷土学習が出来て、地域にどんな学びがあるのかということも併せて、進学だけを考えるのか、何を求めて、中学校へ、高校へ送るかというところを、その市町村の教育委員会にもよるんだと思いますけれど、そういう方向の考え方もあるかなということも思いました。
- 小澤委員 山梨県は小さいですから、そんなに通学に移動距離はないかもしれませんが、他県の例で、確か鳥取だったと思うんですけど、地元の学校に行かせたいので、遠くの学校へ電車通学する人の交通費の補助をしないことにするという住民投票が行われた所を年末のニュースで見ました。山梨県では地元の学校に通ってもらうために、そういうインセンティブをしているのでしょうか。山梨県には、それはないのでしょうか。

- 教 育 長 ございません。
- 小 澤 委 員 小さいですものね。そこまでしなくてもいいのかなど。大きい県だとそういうのがあるのかとびっくりしましたが。
- 教 育 長 県内の人口の問題、県内に定着してもらうために、大学に県内から通っている場合の通学手当の補助を県がやっております。もう一つは、JRなどの公共交通機関をしっかりと維持していきたい、利用者が沢山増えると公共交通機関のダイヤが密になったり、あるいはE電が乗り入れたりというような形で利便性が高まるという相乗効果も期待できるということで、県内と県外で、県内に住んでいただける学生には通学手当を補助しますというようなことを市町村と協力してやっているようなことがあります、中でのやり取りというのはございません。
- 小 澤 委 員 分かりました。ありがとうございます。
- 長 澤 委 員 教育委員会で、どの程度高校に特色づくりをせよと言っているのか、それともあまりそういうことは言っていないのか、教えてもらいたいですが。そういう指示があるのかどうか。
- 保 坂 課 長 各学校の特色については、それぞれの学科や地域性がありますので、既に特色というものをそれぞれが持っているということが一つございます。今年また別の機会に教育委員にお話しさせていただこうと準備していることがございます。個々の魅力をアピールするためのスクール・ミッション、スクール・ポリシーという、その学校の果たすべき役割や、こういう生徒を育成したいというものを文科省から作るよう指示がありまして、それを今まとめております。
- 長 澤 委 員 それは各校が作るんですね、学校が自主的に。
- 保 坂 課 長 各校ごとに作成します。
- 長 澤 委 員 その取組みは重要ですね。ミッションというか、この学校が育てたい生徒というのが際立って来ると、生徒たちが、偏差値だけではなく、こういう基準で選んでくると学校の競争が生まれて面白いなと思います。少し気になるのは、甲府工業などがこれだけ人気がないというのは、相変わらず、とりあえず普通科にということなのか、それはうがった見方かもしれませんが。むしろ特色のある学校がどんどん出来てくると、成績の良し悪し以外の価値基準が出てきて、山梨県はバラエティーに富んだ高校がある県だなとなってきたら、生徒たちもそういう基準で学校を選びたいとなり、お互いに幸せじゃないかなという気もします。
- 保 坂 課 長 そういうものが分かる、一つの参考になるようなものということで、スクール・ミッション、スクール・ポリシーというものを定めています。
- 長 澤 委 員 それは決めれば良いというものではないのでしょうかね。出発点ですよ。本気で取り組まないと、特色なんて出来ないですからね。確か、校長先生は、そんなに任期が長くないですよ、高校の校長は。
- 教 育 長 そうですね。ですから、そういう意味では、なおさら高校としてどうあるべきかというところの軸をしっかりしたものを作って、継続してやらなければいけないと思います。

- 長澤委員 結構西高は特色があるなと思うんですけど、東高校が人気があるのが少し不思議に思うんです。なぜ東高校はいつも人気があるんですか。やっぱり地域性なのか、通いやすいんですか。
- 保坂課長 電車で通いやすいということがあります。
- 長澤委員 電車ですか。それはそうなんでしょうけど、そこにプラス何か東高の魅力とか日川高校の魅力とかがあれば良いと思います。青洲高校が人気があるのは私は嬉しいと思っていたんですが、それもやはり電車で通いやすいからなんですか、市川だから。結局そこになってしまうのでしょうか。
- 教育長 最近甲府から行く子も増えているという話のようです。甲府東がどうしてこれだけ人気があるんだろうというのは、理数コースとか、色々頑張っているというのもあるんでしょうけれど、やはり地域的なもので峡北からも峡東からも通いやすい、交通の便が良いということがあるかもしれません。今回だと甲府昭和が結構高くなっているのですが、交通の便が良くないけれども希望が増えたのはなぜなのか、少し分析するのも面白いのかなと思います。
- 長澤委員 魅力競争になってほしいなと思います。
- 松坂委員 一つ教えてもらいたいのは、スーパーサイエンス校の魅力とはどういものかということと、スーパーサイエンス校は5年間継続ですよね、各学校が国に申請して予算を取って取り組んでいるというやり方だったかと思うのですが、他にもそういうものはあるのでしょうか。スーパーサイエンス校だけですか、そういう各学校で国に申請する取り組みは。
- 保坂課長 農林高校がございます。
- 教育長 マイスター・ハイスクールというものでございます。幾つか工業や農林高校などで色々やっておりますが、高校の学校そのものが実際に行動を起すものですから学校の意欲というのは大切なんですけど、やはり県教委でもお声掛けして、意欲のある所にそういうものに手を挙げてもらい行っています。これまでにしている高校を幾つか紹介してもらえますか。
- 手島教育監 スーパーサイエンスハイスクールにつきましては、巨摩が申請を取り消されましたけれども、甲府南、韮崎、日川が県立高校で指定を受けておまして、ちょうど今年が5年目ですので、今度また再申請をする時期に来ております。11月12月と各校の校長や担当者呼んで、こういう特徴を出して申請をしたらどうでしょうというアドバイスをしながら申請を行っているところであります。それから先程ご紹介がありましたけれども、農林高校も去年からマイスター・ハイスクールに指定されております。その前身にスーパープロフェッショナルハイスクールというのがありまして、甲府工業が今年ちょうど5年目周期の5年目になりますが、そういった事業を行っております。それから甲府第一高校が、以前はスーパーグローバルハイスクールという指定を受けておりましたが、これがスーパーグローバルハイスクールが5年で終わってしまったんですけども、その後継事業で地域との協働による高校改革推進事業のグローバル型に採択され、笛吹高校と連携をしながら取り組みを行ったりと、各校それぞれ特色を生かしながら、そんなことに努めているところであります。
- 佐藤委員 この間の郷土学習の分科会でもその話が出ていましたね。それは探究科の人たちが取り組むんですか。

手島教育監 一高の場合は主として探究科の生徒が取り組んでおりますけれども、ただ総合学習という総合的な探究の時間で、普通科とも連携を図りながら取組みを進めているところです。

松坂委員 何か発表の機会はあるんですか。

手島教育監 あります。各校とも公開で2月、3月に研究発表会等を行っておりまして、色々な学校の先生方をお呼びしたり、一高とか南高校とかは、他県から学校においでいただいて意見交換をしたりというようなこともやっています。

松坂委員 その発表会が、県内の中学生にはあまり知られていないかな、そんな気がしました。

手島教育監 そうですね。学校説明会やオープンスクールが出来ていた時は、一高のスーパーグローバルハイスクールの時には、その研究成果を中学生に向けて発表したりするようなことがあったんですけども、ここ2年そういう機会がコロナの影響で設けられていないというようなことがございまして、ホームページ等では紹介はしているので中学生も見ているとは思いますが、コロナの関係でアピールがしにくい状況にはありまして、なかなか知れ渡らない点があるのかなとも思っております。

松坂委員 何かその発表の機会をその学校だけではなくて、全体で作ってあげるというのも一つ方法であると思います。

手島教育監 そうですね。例えば、巨摩高校では土曜日に中学生を対象にしたスーパーサイエンスハイスクールで行っていた科学の教室をやって、実験を通して科学の面白さを伝えるという地域に還元するような取組みも行っております。もっともっとそういうことを広めていければ良いと思っております。

【 了 知 】

[教育長閉会宣言]

以 上